

米国大統領選挙 ラストベルトはいま

トランプ大統領誕生の原動力「ラストベルト」。
足元の経済は好転しないがトランプ支持は根強い。
民主党候補に穏健派バイデンを求める声が強いが、
虚実ない交ぜの中傷に「中庸」バイデンは耐えられるか。

私は今年一月の冬休みにオハイオ州北東部を再訪した。
かつては製鉄所が川沿いに立ち並び、ブルーカラー労働者
たちが当然のように民主党を支持してきたが、四年前の
大統領選では多くの支持が共和党トランプに流れた地域
だ。中でもトランブル(Trumbull)郡での共和党勝利は
一九七二年以来で、トランプ当選の「グラウンド・ゼロ」
(フアリード・ザカリア)と呼ばれた。

トランプは全米の計二六二六の郡で勝ったが、うち
二〇六郡ではオバマが二〇〇八年、一二年と二連勝して
いた(バロットペディア調べ)。勝者がオバマ→トラン
プとひっくり返ったので「ひっくり返った郡 (flipped
counties)」などと呼ばれている。四〇年以上の民主党優
勢から共和党にひっくり返ったトランブル郡は、その代表

朝日新聞記者

金成隆一

かなり、りゅういち 二〇〇〇年入社。
大阪社会部、ニューヨーク支局、経済
部を経て、二〇〇四年四月から機動特派員。
一八年度ポーン上田記念国際記者賞受
賞。著書に「ルポトランプ王国 もう一
つのアメリカを行く」「ルポトランプ王
国 二ラストベルト再訪」など。

格と云えるだろう。

ここが私の「ラストベルト」定点観測の拠点だ。一五年
二月から通い始め、一七年には三カ月間、月額四五〇ド
ル(光熱費込み)のアパートも借りた。

今年一一月の大統領選では、民主党候補がこれらの郡を
トランプから奪い返せるのかが焦点の一つになる。本稿で
は、一月の再訪時に見えた同地域の「変化」と、大統領選
に向けての民主・共和両党の地元幹部やトランプ支持者の
「認識」を紹介したい。

ニュースの「砂漠化」の懸念

継続取材をお願いして四年になる元製鉄所労働者の
ジョー・シユローデン(六五)宅を訪ねた。製鉄所の中で

も最もきついとされる溶鉱炉で、高卒後に三八年以上働いたことを誇りにする、ラストベルトのど真ん中を歩んだ労働者だ。民主党の支持者だったが、二〇一六年は共和党トランプを支持するために初めて民主党を離れた。あの大統領選を象徴する投票行動である。

私がこの地域を初めて訪れた時、車道がガタガタで、大國なのに基本インフラの整備が追いついていないことが印象的だった。ところが今回の訪問では、もう一つ別のインフラも傷んでいることに気づいた。ニュースのインフラだ。

ジョーの妻で小学校教諭のキャロルが自宅に、隣接するマホニング郡の地元紙「ヴェインディケーター」(The Vindicator)の束を用意してくれていた。約一五〇年の歴史を持つが、経営難から一九年八月末に廃刊になった。私は日本に帰任していたが、ニュースで廃刊を知り、最後の一週間分を買って欲しいとお願ひしていたのだ。

廃刊直前の朝刊一面トップは「ヴェインディケーターの日没」という記事。「日刊紙があってもマホニング郡では汚職が数十年間はびこった。ヴェインディケーターの廃刊後はどうなるのか?」と強調され、同地域の一部が「ニュース砂漠」(news desert)になるのだろうかとの懸念を伝えられている。

メディア研究で知られるノースカロライナ大の研究機関は、「ニュース砂漠」を「草の根レベルの民主主義を育む、包括的で信用できるニュースや情報への限定的なアクセスしか持たない地方または都市のコミュニティ」と定義する。同機関の集計によると、〇四年に八八九一あった地方紙は、一八年までに一七七九紙が廃刊か吸収合併で消えたという。ざっと二割減だ。

地方紙の廃刊が相次ぐ米国では、役場や議会を第三者の視点で追い、ニュースとして伝える報道機関がなくなることへの懸念が広がっている。地元紙の廃刊後、地方選挙の投票率が下がった、現職候補が再選しやすくなった、立候補者が減ったなどの研究結果が話題になったこともある。

それでも私は、かつて製鉄業や製造業が栄え、最も豊かなミドルクラスの地域の一つとして知られたオハイオ州北東部はしばらく大丈夫そうだと、廃刊に至る記事を読むまでは思っていた。それは誤りだった。「ニュース砂漠」の懸念は早くも表面化しているのだ。

米国ではニュース以外の「砂漠化」も懸念されてきた。その一つが病院のない「病院砂漠」(hospital desert)だが、マホニング郡でも拠点病院の一つが一八年九月に閉鎖されたばかり。さまざまなインフラの弱体化が地域に影を落と

している。

取材時点で全米の株価は史上最高値の更新を続けていたものの、少なくともこのエリアでは経済の明るいニュースが聞こえてこない。労働者のあこがれの職場だったゼネラル・モーターズ（GM）のローズタウン工場は一九年に閉鎖。私の取材相手も他州に引っ越したり、単身赴任したりしている。GMの不振が伝えられる中、トランプは存続を求め、就任から半年後の一七年に近くで開いた集会では、「オハイオを去った仕事はすべて戻ってくる」「引っ越すなよ、家を売るなよ」と支持者に呼びかけたが、かなわなかった。「偉大な米国が戻ってきた」と言える材料は見当たらない。

共和党幹部「一番の強敵はバイデン」

それでもジョーのトランプ支持に揺らぎはなかった。食卓にトランプ陣営から届いた封書があり、アンケート用紙が入っていた。最近ジョーは視力が落ち始めているため、私が質問を読み上げることになった。

再選を支持する？「イエス」

大統領の仕事ぶりを認める？「イエス」

米国経済の認識は？

ジョーは四つの選択肢から一番上の「経済は力強く、次の一二月も成長を続ける」を選んだ。私とその根拠を聞くと、絶好調の株価、手頃なガソリン価格、シリアやアフガニスタンからの米兵撤退方針を挙げた。

とはいえ、繰り返しになるが、足元の経済に明るい材料は見当たらない。私は「本当に失望している点はない？」と尋ねた。ジョーは三年前の取材時とそっくりの言葉を返してきた。「オレは政治家がやると言ってやらないことに慣れている。トランプが約束の割でも果たせば満足だ」。ジョーが求めていた「給料払いのよい仕事」も戻っていない。それを指摘しても、「巨額の設備投資を要する製鉄所が戻ってこないことぐらいわかっている」とやけに物わかりがいい。その上で「史上最高値の株価を記録し続ける大統領がかったか？ 再選させない理由はどこにもない」と強調した。

ジョーが民主党支持に戻る気配はない。

トランプル郡の共和党幹部の見方も聞きに行った。共和党の郡本部を土曜に訪ねると、委員長ケビン・ウィンダムが忙しそうに会合の後片付けをしていた。地元選挙の候補者を集めたトレーニングが終わったところだという。

ケビンが手応えを語った。「トランプ人気のおかげで、

大統領選だけでなく、他の選挙もかつてなく勢いづいている。従来は民主党が圧倒的に強く、共和党候補は三五%でも得票できれば『がんばったね』と満足していたが、今回は勝てるかもしれない。

その象徴が、同州の連邦下院第一三選挙区だという。現職ティム・ライアンら民主党候補が六〇七割の得票率で常勝してきたが、今年は七人の共和党候補が予備選で競っているという。ケビンはこの共和党の予備選がこんな激しいのは初めて。競争が活発になれば、強い候補を出せる。ライアンの議席を本気で狙う」と意気込んでいた。

ケビンには、大統領選でどの民主党候補が最も手強く映るのだろうか。ケビンは答えた。「トランプの最大の敵はバイデン。実現性の怪しいことばかり言っている革新派サンダースに比べ、副大統領を八年務めたバイデンは経験を積んだ指導者として売り込みやすい。穏健派の有権者が安心できる」。

民主党幹部も「バイデン」推し

民主党側の意見も聞いてみよう。トランプル郡の民主党委員長ダン・ポリフカに会いに行った。ダンには公選職の郡コミッショナーでもある。今年には身内から挑戦者が現れ、

二カ月後に自分の選挙も控えていると言い、いつになく発言が慎重だった。それでも「トランプに投票したことを後悔し、今回は民主党支持に戻ってくる有権者はいる。特に（中国との関税戦争で打撃を受けた）農家が戻ってくる。一六歳の少女（環境活動家グレタ・トゥンベリ）を批判するなど、感情むき出しのツイートにうんざりしている人も少なくない」と話した。

ダンは、ラストベルトでトランプに流れた票を奪い返すには、民主党が穏健派を立てることが重要だと主張してきた。革新派サンダースの支持率が上向いていたことを念頭にダンは語った。「ここで勝てるのは実績があるバイデンだ。革新派のサンダースとウォーレンにも強みはあるが、トップに立てるかという疑問だ。民主党はもっと主流になるべきだ」。

彼は二年前のインタビューでは、もっと大胆に革新派への懸念を語っていた。「そもそもオレたちは『ケネディ時代』の民主党員だ。当時の民主党の考え方は、今ではまるで共和党のように聞こえるだろう。かつての民主党はもっと保守的で、『家族の価値』を掲げていた。今とは違ったんだ。ここでは民主党は『働く人々の政党』を強調すればいい。全米規模で民主党はもっと真ん中に戻る必要がある。リベ

ラルになつてはダメだ。党を痛めることになる」。

米国では民主党内の分裂が指摘されている。ニューヨークやサンフランシスコなど沿岸の都市部で暮らすリベラル派と、中西部のような内陸部の保守派の分裂だ。「この二つに分断を感じるか」と聞いた。

ダンは深くうなずいて説明した。「私たちは家族の価値、労働者の権利、武器を携行する権利を訴える。ここにはLGBTQ（性的少数派）とか『黒人の生命も大切だ』運動にうんざりしている人々がいる。それらすべても大切だけれど、ただ過剰だった」。

私が、穏健派の候補を立てないと民主党は大統領選で中西部の支持を取り戻せないという趣旨かと重ねて確認した。ダンは「そうだ、間違いない」と即答した。

多くの客と接するダイナー店主の言葉

訪問の最後にトランブル郡のダイナーを訪れた。店主アフレットに話を聞くためだ。創業以来三三年間、出勤前の労働者にコーヒーを注いできた。カウンター席には常連客が多く、時事ネタも話題になる。彼はそんな日常会話からこの地域の空気をよくつかんでいる。

客商売なので、これまでは政治についての録音インタ

ビューには応じてもらえなかった。しかし、今回は笑顔で一一分間も応じてくれた。よっぽど言いたいことがあったようだ。

「民主党がどんどん中央から（左に）ずれている。左派の考え方が過剰だ。社会保障制度やメデイケア（高齢者向け）、メデイケイド（低所得者向け）など、社会主義（socialist）の制度はもともとあるけど、今の民主党からは『学費無料、医療無料、借金チャラ』と聞こえてくる。発想がギブ、ギブ、ギブばかり。誰かが払わないといけないのだから、このあたりの人々はそんなものが機能しないことを知っている。だからトランプ嫌いの人でも、『自分の懐具合はいいし、あの人もこの人も調子がよさそうだ。トランプのことは好きにはなれないが、今のまま（トランプ再選）でいい』と思っているんだ」。

そして今年、トランプがトランブル郡で票をさらに上積みし、隣接するマホニング郡でも勝つのもかもしれない、と話した。民主党の「牙城」マホニング郡では、オバマが二〇一二年に三〇ポイント近い差をつけて圧勝し、一六年は不人気ヒラリー・クリントンでも三ポイント差で逃げ切った。アフレットには、トランプはトランブル郡に続いて、マホニング郡でも勝利する勢いに映るといふ。

バイデンは「情報戦」に耐えられるか

取材を終えてジョー宅に戻ると、ジョーはソファに寝転んでテレビを見ていた。保守系フォックスニュースと、いずれも新興放送局のワン・アメリカ・ニュース（OAN）とニューズマックス。トランプに好意的な姿勢が強い、この三局を行ったり来たりするのが日課だ。

たまたま、この日が「信教の自由の日」（二月一六日）だったので、いずれの放送局でも、公立校でのお祈りを望む生徒を保護するとしてトランプ政権の姿勢が大きく報じられていた。フォックスニュースは「歴史上トランプ大統領ほど、信仰の自由の擁護者だった人物は米国だけでなく世界を見渡してもいない」との絶賛の声を伝えていた。

これを除くと、各局とも民主党側への批判が目立った。最大の標的は民主党有力候補のバイデンだ。副大統領在任中、息子ハンターがウクライナ企業から巨額の役員報酬を受け取っていたとされる問題について、フォックスニュースは「ウクライナ語も知らない、経験ゼロの息子が巨額の支払いを受けていた」と徹底批判を加えていた。トランプとの一騎打ちになれば、このような攻撃はさらに勢いを増して連日続くことになる。

今回の取材では、両党の地元幹部からラストベルトで強い民主党候補はバイデンとの一致した見方が聞こえてきた。しかし、当初から有力候補と目されてきたバイデンについて、トランプ陣営がさまざまな攻撃材料を集めていることは間違いない。バイデンの長い政治キャリアは、実績であると同時にライバルからの攻撃材料にもなる。

ジョーはテレビを見ながら言った。「民主党予備選を勝ち抜くのはバイデンで、秋以降にあるトランプとの討論対決は必見の番組になる。トランプは一分間に『ハンター・バイデン』の名前を一〇回連呼して攻めるはずだ。四年前に共和党内で主流派ライバルを次々となぎ倒したように、今回もバイデンを蹴散らすに違いない」。

世論調査機関ピュー・リサーチ・センターによると、前回の大統領選では、トランプ支持者の間だけでなく全有権者でみても、主要なニュース源は保守系のフォックスニュースが首位だった。メディアアのバイデン批判に加え、ネット上では真偽不明のゴシップも出回っている。トランプというスキャンダルへの耐性が異様に強い現職に対し、バイデンが本当に強い候補になれるのか。一月に向けて大量に流される、虚実ない交ぜの情報に選挙戦全体が、そして世界が翻弄される気がしてならない。（敬称略） ●